フランシスコ教皇

使徒的書簡

『父の心で』

聖ヨセフを、普遍教会の保護者とする宣言150周年

目次

[（はじめに） 1](#_Toc62485311)

[1．愛される父 2](#_Toc62485312)

[2．やさしさの父 3](#_Toc62485313)

[3．従うことにおける父 4](#_Toc62485314)

[4．受け入れることにおける父 6](#_Toc62485315)

[5．創造的勇気の父 7](#_Toc62485316)

[6．労働者である父 9](#_Toc62485317)

[7．影にいる父 9](#_Toc62485318)

[（おわりに） 11](#_Toc62485319)

# （はじめに）

「父の心で」：このようにヨセフはイエスを愛しました。四つの福音はすべてイエスを「ヨセフの子」と呼んでいます[[1]](#footnote-2)。

二人の福音記者、マタイとルカは、ヨセフの姿を強調しています。少ししか語っていませんが、彼がどのような父親であったか、神の摂理によって彼に託された使命がどのようなものであったのかを理解するには十分です。

ヨセフは貧しい大工で（マタ13・55参照）、マリアの婚約者でした（マタ1・18；ルカ1・27参照）。「正しい人」で（マタ1・19）、いつも神の律法の中に（ルカ2・22，27，39参照）、また四回もの夢を通して（マタ1・20；2・13，19，22参照）示された神のみ心に従う準備が出来ていました。ナザレからベツレヘムまでの、長くたいへんな旅の後で、メシア（救い主）が家畜小屋で生まれるのを見ました。他のところには「彼らのために場所がなかった」（ルカ2・7）からです。彼は、イスラエルの民を代表する羊飼いたちや（ルカ2・8－20参照）、異教の民を代表する博士たち（マタ2・1－12）の礼拝の証人です。

ヨセフは、イエスの法的父の役割を担う勇気をもち、イエスに、天使によって啓示された名を付けました：「その子をイエスと名づけなさい。その子は自分の民を罪から救うからである」（マタ1・21）。よく知られているように、古代の人々の間で、人やものに名前を与えることは、その帰属を獲得することを意味しました。創世記の物語の中でアダムがしたように（2・19－20参照）。ヨセフは神殿で、生まれてから四十日目に、幼子を、母と共に主に捧げ、シメオンがイエスと母に対して行った預言を、驚きをもって聞きました（ルカ2・22－35参照）。イエスをヘロデから守るために、外国人としてエジプトに滞在しました（マタ2・13－19）。自分の国に戻った後、ガリラヤの、知られていない小さなナザレの村に隠れて住みました―そこからは「預言者は出ない」「何もよいものは出ない」と言われていました（ヨハ7・52；1・46）－。自分の生まれた町ベツレヘムからも、神殿のそびえるエルサレムからも遠く離れて。まさに、エルサレムへの巡礼の間に、12歳のイエスがいなくなったとき、ヨセフとマリアは心配して探し、イエスが神殿の中で律法の学者たちと論じあっているところを見つけました（ルカ2・41－50参照）。

神の母マリアの次に、彼女の夫ヨセフほど、教皇の教導職の中で大きなスペースを占めている聖人はいません。わたしの前任者たちは、福音によって伝えられている少しの事実の中に含まれているメッセージを深めました。救いの歴史における、ヨセフの中心的役割をより強調するために：福者ピオ九世はヨセフを「カトリック［普遍］教会の保護者」と呼び[[2]](#footnote-3)、尊者ピオ十二世は「労働者たちの保護者」として[[3]](#footnote-4)、聖ヨハネ・パウロ二世は「あがない主の守護者」として[[4]](#footnote-5)示しました。キリストの民は彼を「良い臨終の擁護者」として嘆願します[[5]](#footnote-6)。

ですから、福者ピオ九世が、1870年12月8日に「カトリック教会の保護者」と宣言してから150年を迎えるにあたって、わたしは、イエスが言うように、「口が心から溢れ出ることを語る」（マタ12・34参照）ことを望みます。あなた方と共に、わたしたち一人ひとりの人間の状態にひじょうに近い、この並外れた姿についての個人的ないくつかの考察を分かち合うために。そのような望みは、このパンデミックの時期に大きくなりました。わたしたちを襲っている試練のただ中で、わたしたちは経験しています。「わたしたちの人生は、通常忘れられている普通の人々によって織りなされ、支えられていることを。彼らは、新聞や雑誌の見出しにも、最近の『ショー』の『キャットウォーク』にも現れれませんが、疑いもなく、今日、わたしたちの歴史の決定的出来事を書いています：医者、看護師、スーパーの店員、清掃員、運転手、警察、ボランティア、司祭、修道者、そして、誰も一人では救われないことを理解している他のたくさんの人々。［…］どんなに多くの人が、パニックではなく、共同責任を広めるよう留意しながら、毎日忍耐を行使し、希望を吹き込んでいるでしょうか。どんなに多くのお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、先生たちが、わたしたちの子供たちに、日々の小さなジェスチャーで、どのように試練と向き合い、それを乗り越えるかを示しているでしょうか。習慣を適応させ、まなざしを上げ、祈りを促しながら。どんなに多くの人が、すべての人の善のために祈り、捧げ、執り成しているでしょうか」[[6]](#footnote-7)。誰もが聖ヨセフの中に見出すことが出来ます：気づかれずに通り過ぎる人、控えめで隠れた、日常的に存在する人、執り成す人、困難の時における支え、導きを。聖ヨセフはわたしたちに思い起こします。一見隠れている人や、「第二線」にいる人たちみなが、救いの歴史の中で比類のない中心的役割を担っていることを。彼らすべては、認められ感謝されるに値するのです。

# 1．愛される父

聖ヨセフの偉大さは、彼が、マリアの夫であり、イエスの父であったという事実から成り立っています。このようにして、聖ヨアンネス・クリュソストモスが断言しているように「救いの計画全体の奉仕に身を置いた」[[7]](#footnote-8)のです。

聖パウロ六世は、彼の父性は、次のことに具体的に表されていると述べています：「彼の生涯を、受肉の神秘とそれに結びついたあがないをもたらす使命への奉仕、捧げもの（sacrificio）にしたことにおいて。聖家族に対する彼に求められた法的権限を使って、それを自分自身、自分の人生、自分の仕事の完全な贈与としたことにおいて。彼の人間としての召命を、家庭内の愛に変換したこと――自分自身、自分の心、あらゆる能力を超人的な形で捧げることにおいて（oblazione）、彼の家の中で生まれたメシアへの奉仕に置かれた愛において――」[[8]](#footnote-9)。

この、救いの歴史における彼の役割のために、聖ヨセフは、つねにキリストの民に愛されてきた父です。それは次の事実が示しています：世界中の多くの教会が彼に捧げられ；多くの修道会、信心会、教会内のグループが、彼の霊性にインスピレーションを受け、彼の名を運び；何世紀にもわたって、彼をたたえるためにさまざまな聖なる表現が発展したこと。多くの聖人たちが、聖ヨセフの熱心な崇敬者でした。中でもアビラの聖テレサは、自分自身を彼に委ね、彼に願ったすべての恵みを受け取りながら、彼を擁護者、執り成し手としました。また、自分の経験に力づけられ、聖女は他の人々に聖ヨセフを崇敬するよう勧めました[[9]](#footnote-10)。

あらゆる祈りの本（マニュアル）には、聖ヨセフへの祈りがあります。毎週水曜日、特に、伝統的に彼に捧げられている三月全体に、聖ヨセフへの特別な祈りが向けられます[[10]](#footnote-11)。

キリストの民の聖ヨセフへの信頼は、「Ite ad Ioseph［ヨセフのところに行きなさい］」という言葉に要約されています。それは、飢饉の時代に、エジプトで、人々がファラオに食料を求め、彼が「ヨセフのもとに行き、彼がお前たちに言うとおりにせよ」（創世記41・55）と答えたことに関連しています。それは、ヤコブの息子のヨセフのことです。彼は兄弟たちの妬みのために［奴隷として］売られ（創37・11－28参照）、－聖書の物語によると―エジプトの王に次ぐ者となりました（創41・41－44参照）。

イエスは、預言者ナタンがダビデにした約束に従って、ダビデの根から生まれることになっていました（サム下7参照）。聖ヨセフは、ダビデの子孫として（マタ1・15，20参照）、またナザレのマリアの夫として、旧約と新約を結ぶちょうつがいとなったのです。

# 2．やさしさの父

ヨセフは、イエスが、日々「知恵も増し、背丈も伸び、ますます神と人に愛された」（ルカ2・52）のを見ます。主がイスラエルにしたように、ヨセフはイエスに、歩むことを教え、彼を腕に抱えました。イエスに対して、赤子を抱え上げて頬ずりする者のようであり、身を屈めて彼に食べさました（ホセ11・3－4参照）。

イエスは、神のやさしさをヨセフの中に見ました：「父が子を憐れむように、主は、ご自分を畏れる者を憐れまれる」（詩103・13）。

ヨセフは、詩編の祈りの中で、イスラエルの神が、すべての人に善い方であり、「その憐みはすべてのものの上にある」（詩145・9）、やさしさの神[[11]](#footnote-12)であるという響きを会堂で聞いたことがあるでしょう。

救いの歴史は、わたしたちの弱さを通して、「望みのないときに望みを抱く」（ロマ4・18）ことにおいて成し遂げられます。ひじょうにしばしば、わたしたちは、神がわたしたちの良い部分、勝利の部分だけを頼りにしていると考えます。しかし実際は、神の計画のほとんどの部分は、わたしたちの弱さを通して、弱さにも関わらず実現されます。それは聖パウロに言わせます：「思い上がらないように、わたしの体には一つの刺が与えられました。それは、思い上がらないようにと、わたしを打ちのめすために送られたサタンの回し者なのです。この回し者について、立ち去らせてくださるように、三度わたしは主にお願いしました。しかし、主は、『お前はわたしの恵みで十分だ。弱さにおいてこそ、力は余すところなく発揮されるのだ』とお答えになりました」（二コリ12・7－9）。

もしこれが救いの営みの展望（視点）であるなら、わたしたちは深いやさしさをもって自分の弱さを受け入れることを学ばなければなりません[[12]](#footnote-13)。

悪魔はわたしたちに、否定的な判断でわたしたちの弱さを見させますが、聖霊はやさしさをもってそれを明るみに出します。わたしたちの中にある弱さに触れるための最上の方法は、やさしさです。わたしたちが他の人々に対して使う、指をさすことや裁くことは、しばしば、わたしたち自身の弱さ、脆さを、わたしたちの中に受け入れることが出来ないことの表われです。わたしたちを「告発者」のわざから（黙12・10参照）救うのは、やさしさだけです。そのため、真実とやさしさの経験をしながら、特に「赦しの秘跡」において、「神のいつくしみ」に出会うことが大切です。逆説的に、悪魔もまた、わたしたちに真実を言うことが出来ます。けれど、わたしたちを非難するためにそれをします。しかしわたしたちは知っています：神から来る「真実」は、わたしたちを非難するのではなく、わたしたちを受け入れ、抱きしめ、支え、赦すことを。「真実」はいつも、たとえ話のいつくしみ深い「父」のように自らを示します（ルカ15・11－32参照）：わたしたちに会いに来て、わたしたちに再び尊厳を与え、わたしたちを立ち直らせ、わたしたちのために祝宴を開いてくれます。「この子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから」（24節）、と。

ヨセフの困窮を通しても、神のみ心、神の物語、神の計画が示されます。ヨセフはこのようにしてわたしたちに、神を信じることは、神が、わたしたちの恐れ、脆さ、弱さを通しても働くことができると信じることも含まれていると教えます。そしてわたしたちに、人生の嵐のただ中で、神に、わたしたちの船の舵を委ねることを恐れてはならないと教えます。時にわたしたちは、すべてをコントロールしようとします。けれど神はつねに、より大きなまなざしをもっているのです。

# 3．従うことにおける父

神がマリアに救いの計画を示したときと同じように、神はヨセフにも、ご自分の計画を明らかにしました。神はそれを、夢を通して行いました。夢は、聖書の中で、また古代の人々の間で、神がご自分の意志を明らかにするための手段の一つと考えられていました[[13]](#footnote-14)。

ヨセフは、マリアの不可解な妊娠を前にして、ひじょうに苦悩しました。彼はマリアを「公に非難する」ことを望まず[[14]](#footnote-15)、「ひそかに離縁しよう」（マタ1・19）と決心しました。最初の夢の中で、天使は、彼の深刻なジレンマの解決を助けます：「恐れずにマリアを妻として迎え入れなさい。彼女の胎内に宿されているものは、聖霊によるのである。彼女は男の子を産む。その子をイエスと名づけなさい。その子は自分の民を罪から救うからである」（マタ1・20－21）。彼の答えは即座でした：「ヨセフは眠りから覚めると、主の使いが命じたとおり、彼女を妻として迎え入れた」（マタ1・24）。従うことで、彼は自分のドラマ（悲劇）を克服し、マリアを救ったのです。

二番目の夢の中で、天使はヨセフに命じます：「起きよ。幼子とその母を連れて、エジプトへ逃げよ。そして、わたしが告げるまで、そこに留まれ。ヘロデが幼子を探し出して、殺そうとしている」（マタ2・13）。ヨセフはためらわずに従います。出会うだろう困難について質問することなしに：「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母とを連れてエジプトへ逃れ、ヘロデが死ぬまでそこに留まった」（マタ2・14－15）。

エジプトでヨセフは、信頼と忍耐をもって、天使が約束した、自分の国に帰るための知らせを待ちました。神の使いが、第三の夢の中で、幼子を殺そうとしていた者たちが死んだことを知らせ、起きて、幼子とその母を連れてイスラエルに行くよう命じると（マタ2・19－20参照）、ヨセフは再び、直ちに、ためらうことなく従います：「ヨセフは起きて、幼子とその母を連れてイスラエルの地に帰った」（マタ2・21）。

しかし、帰りの旅の途中で、「アルケラオが父のヘロデの跡を継いでユダヤを治めていると聞いて、ヨセフはそこに行くのを恐れた。すると、夢の中でお告げを受けたので――それは四回目です――、ガリラヤ地方に逃れ、ナザレという町に行って住んだ」（マタ2・22－23）。

他方で、福音記者ルカは、ヨセフが、ナザレからベツレヘムまでの長くて困難な旅に立ち向かったことを記しています。それは、住民登録に関する皇帝アウグストゥスの勅令に従って、自分が生まれた町で登録するためでした。そしてイエスが生まれたのは、まさにこの状況の中であり（2・1－7参照）、イエスは、他のすべての子どもたちと同じように、帝国の登記所に登録されました。

聖ルカは特に、イエスの両親が律法のすべての規定、つまり、イエスの割礼の儀式、マリアの出産後の清めの儀式、初めて生まれた子を主に捧げる儀式を守っていたことを指摘しています（2・21－24参照）[[15]](#footnote-16)。

ヨセフは、人生のあらゆる状況の中で、自分の「はい（fiat）」を言うことを知っていました。お告げにおけるマリアのように、ゲッセマネでのイエスのように。

ヨセフは一家の長として、神の戒めに従い（出20・12参照）、イエスに、両親に従順であることを教えました（ルカ2・51参照）。

イエスは、ナザレの隠れた生活において、ヨセフの学び舎で御父のみ心を行うことを学びました。御父のみ心は、イエスの毎日の糧となりました（ヨハ4・34参照）。ゲッセマネで経験した、人生で最も困難な時でも、自分の意志ではなく、御父のみ心を行うことを望み[[16]](#footnote-17)、「死に至るまで、十字架の死に至るまで［…］従う者となられました」（フィリ2・8）。このため、「ヘブライ人への手紙」の作者は、イエスが「数々の苦しみによって従順を学ばれました」（5・8）と結論付けています。

これらすべての出来事から、ヨセフが「父としての権威を行使することによって、直接イエスとその使命に奉仕するよう神から召され」たこと、「このようにして、時が満ちるに及んで、偉大な救いの神秘に力を貸し、実際に『救いの奉仕者』と［なった］」[[17]](#footnote-18)ことが分かります。

# 4．受け入れることにおける父

ヨセフはマリアを、何の条件（予防策）もなく受け入れます。ヨセフは、天使の言葉に信頼します。「彼の心の高貴さは、律法を通して学んだことを、愛のわざに従属させます（愛のわざの下に置きます）。女性に対する心理的暴力、言語や身体的な暴力が明らかになっている今日の世界において、ヨセフは、すべての情報をもっていなくても、マリアの名誉、尊厳、いのちのために決心する、他者を尊重する、繊細な人として現れます。そして、よりよく行動するにはどうしたらいいのか迷っていた彼を、神は、彼の判断を照らしながら、選択することを助けました」[[18]](#footnote-19)。

ひじょうにしばしば、わたしたちの人生において、意味を理解することが出来ない出来事が起こります。わたしたちの最初の反応は、しばしば、失望や反抗です。ヨセフは、起こっていることに場所を空けるために（受け入れるために）、自分の推論をわきに置き、彼の目にそれがどんなに神秘的に見えても、それを受け入れ、その責任を担い、自分自身を自分の物語（歴史：ストーリー）と和解させます。もしわたしたちが、わたしたちの物語と和解しないなら、次の一歩を踏み出すことも出来ないでしょう。わたしたちはつねに、期待と、その結果としての失望に縛られたままだからです。

ヨセフがわたしたちに示す霊的生活は、説明する道ではなく、受け入れる道です。この受容（受け入れること）から、この和解から出発して初めて、人はさらに大きな物語（ストーリー）、さらに深い意味を直観することが出来るのです。ヨブの烈しい言葉が反響しているように思われます。ヨブは、彼に起こったすべての悪に対して反抗するよう招く妻に、答えます：「わたしたちは神の手から善いものを受けるのだから、悪いものも受けるべきではないか」（ヨブ2・10）。

ヨセフは、受身的にあきらめる（甘受する）人ではありません。彼は勇敢で強い主人公です。受容は、それを通して、わたしたちの人生の中で、聖霊から来る剛毅（強さ）の賜物が現れる方法です。主だけが、人生をありのままに受け入れ、存在の矛盾した、予期しない、期待外れの部分にも空間を差し出す力を与えてくださるのです。

わたしたちのただ中への、イエスの到来は、父である神の賜物です。わたしたち一人ひとりが、たとえ完全に理解していなくても、自分の物語（ストーリー）の「肉」と和解出来るように。

神は、わたしたちの聖人に、「ダビデの子ヨセフよ、恐れるな」（マタ1・20）と言いました。神は、わたしたちにも繰り返しているようです：「恐れるな！」。怒りと失望を放棄し（わきに置き）、世俗的なあきらめなしに、しかし希望に満ちた剛毅（強さ）をもって、わたしたちが選んだわけではなくても、存在しているものに空間を差し出す必要があります。このようにして人生を受け入れることは、わたしたちを隠された意味へと導きます。わたしたち一人ひとりの人生は、福音がわたしたちに示していることに従って生きる勇気を見出すなら、奇跡的に再出発することが可能です。もはやすべてが間違った方向に向かってしまったように見えても、幾つかのことがすでに取り返しのつかないことになってしまったとしても、それは問題ではありません。神は、岩から花を芽生えさせることが出来ます。もしわたしたちの心が、何かを咎めたとしても、神は「わたしたちの心よりも偉大であり、すべてをご存知です」（一ヨハ3・20）。

再び、存在するものを何も捨て去らないという、キリスト教的リアリズム（現実主義）が戻ります。現実は、その神秘的な不可解さと複雑さの中に、存在の意味をその光と影とともに運ぶものです。これが使徒パウロに言わせます：「神を愛する人々のために益となるように、すべてが互いに働き合うことをわたしたちは知っています［わたしたちは、すべてのものが神を愛する者のために善に寄与することを知っています］」（ロマ8・28）――これに聖アウグスチヌスは加えます：「悪と呼ばれているものも」（«etiam illud quod malum dicitur»）[[19]](#footnote-20)――。この総合的展望において、信仰は、あらゆる嬉しい出来事や悲しい出来事に意味を与えます。

ですから、信じることは、安易な慰めをもたらす解決策を見出すことだと考えるなど、とんでもありません。キリストがわたしたちに教えた信仰はそうではなく、聖ヨセフの中に見る信仰です。それは近道を求めず、起こっていることに「目を見開いて」向き合います。それに対して自分が先ず責任を取りながら。

ヨセフの受容は、わたしたちに、誰も除外せず、ありのままに他の人を受け入れる（迎え入れる）よう招きます。弱い人たちを優先しながら。なぜなら、神は弱いものを選び（一コリ1・27参照）、「孤児の父、やもめの保護者」（詩68・6）であり、異国の人を愛するよう命じるからです[[20]](#footnote-21)。わたしは想像します。イエスは、ヨセフの態度から、放蕩息子と、いつくしみ深い父のたとえ話（ルカ15・11－32参照）のヒントを得たと。

# 5．創造的勇気の父

もし、あらゆる真の内的癒しが、自分の物語（ストーリー）を受け入れること、つまり、わたしたちの人生の中で、自分が選択していないものにも、自分の中に空間を差し出すことであるなら、もう一つの大切な特徴を加える必要があります：創造的な勇気。それは特に、困難に遭遇したときに現れます。実際、困難を前にして、わたしたちは立ち止まり、競技場を放棄することも出来るし、何とかして頑張ることも出来ます。時に、まさに困難が、わたしたち一人ひとりの中にある、思っても見なかった資源を引き出してくれます。

ひじょうにしばしば、「幼年期の福音」を読んでいると、なぜ神は直接的、明確なやり方で介入しなかったのだろう、という問いかけが浮かびます。しかし神は、出来事や人を通して介入します。神はヨセフを通して、あがないの歴史の始まりを配慮します。ヨセフは、彼と共に神が、幼子とその母を救う、真の「奇跡」です。天は、この人の創造的勇気に信頼して介入します。ヨセフは、ベツレヘムに着き、マリアが出産できる宿がなかったので、世に来られる神の御子を迎える、出来る限りふさわしい場所となるよう、馬小屋を整え、準備します（ルカ2・6－7参照）。幼子を殺そうとするヘロデの、差し迫った危険に直面したヨセフは、再び夢の中で、幼子を守るよう警告を受け、真夜中にエジプトへの逃避を計画します（マタ2・13－14参照）。

これらの叙述を表面的に読むと、この世が強い人、権力のある人たちの支配の中にあるような印象を受けます。しかし、福音の「善い知らせ」は、地上の支配者たちの傲慢さや暴力にも関わらず、神がつねに、ご自身の救いの計画を実現するための方法を見出していることを示しています。わたしたちの人生も、時に、権力者たちの支配の中にあるように思われます。けれど福音はわたしたちに教えます。大切なのは、もしわたしたちが、ナザレの大工のように創造的な勇気を使うなら、神がつねに世を救うことが出来るということを。ヨセフはいつも、神のみ摂理への信頼を優先させながら、問題を機会（チャンス）に変えることを知っていました。

時に、神は、わたしたちを助けてくださらないように見えることがあります。それは、神がわたしたちを見捨てたということではなく、わたしたちに信頼しているということ、わたしたちが計画し、発明し、見出すことが出来るものに信頼しているという意味です。

それは、中風の人をイエスの前に差し出すために、屋根から彼を下ろした友人たちが示したのと同じ、創造的な勇気です（ルカ5・17－26参照）。困難は、これらの友人たちの大胆さと頑固さを止めませんでした。彼らは、イエスが病人を癒すことが出来ると確信し、「人が多くて中に運び入れるすべがなかった［ので］、屋根に上り、瓦をはいで、病人を床ごと、人々の真ん中、イエスの前に吊り下ろし［まし］た。イエスはその人たちの信仰を見て、『人よ、あなたの罪は赦された』と仰せに［なりました］」（19－20節）。イエスは、病気の友人をご自分のところに連れてこようとした、彼らの創造的な信仰を認めました。

福音書は、マリア、ヨセフ、幼子イエスがエジプトにいた期間についての情報は与えていません。しかし確かに、彼らは食べる必要があり、家と仕事を見つける必要があったでしょう。この点については、福音の沈黙を埋めるのに、それほどの想像力は必要ありません。聖家族は、他のすべての家族のように、特に、災難と飢えを強いられ、今日もまた命を危険にさらしている、多くの移住者の兄弟たちのように、具体的な問題に直面しなければなりませんでした。この意味で、聖ヨセフは、戦争、憎しみ、迫害、貧窮のために自分の土地を離れなければならないすべての人のための、特別な守護者であるとわたしは考えます。

ヨセフが主人公であるすべての出来事の最後に、福音書は、ヨセフが起き上がり、幼子とその母を連れて、神が彼に命じたことを行ったと記しています（マタ1・24；2・14，21参照）。実際、イエスとその母マリアは、わたしたちの信仰の中で最も尊い宝です[[21]](#footnote-22)。

救いの計画の中で、御子をその母、「信仰の旅路を進み、十字架に至るまで子との一致を忠実に保［った］」[[22]](#footnote-23)方から、引き離すことは出来ません。

わたしたちはつねに自問しなければなりません。神秘的な方法で、わたしたちの責任、わたしたちの世話、わたしたちの保護に託された、イエスとマリアを全力で守っているか、と。全能の方の御子は、ひじょうに弱い状態をまとって、世に来ました。自らを、擁護され、守られ、世話され、育てられるために、ヨセフの助けが必要な者としました。神は、マリアがそうしたように、ヨセフに信頼します。マリアはヨセフの中に、彼女の命を救うことを望むだけでなく、つねに彼女と幼子に必要なものを備える人を見出します。この意味で、聖ヨセフは、まさに教会の保護者です。なぜなら、教会は、キリストの「からだ」の歴史における延長であり、同時に、教会の母性の中に、マリアの母性がほのめかされているからです[[23]](#footnote-24)。ヨセフは、教会を守り続けることによって、幼子とその母を守り続けます。わたしたちもまた、教会を愛することによって、幼子とその母を愛し続けます。

この幼子は、「これらのわたしの兄弟、しかも最も小さな者の一人にしたことは、わたしにしたのである」（マタ25・40）と言う方です。このように、一人ひとりの困っている人、貧しい人、苦しんでいる人、死にかけている人、見知らぬ人、囚人、病人は、ヨセフが守り続けている「幼子」なのです。これが、聖ヨセフが、困窮している人、助けを必要としている人、追放された人、苦悩している人、貧しい人、死にかけている人の保護者として嘆願されている理由です。これが、教会が何よりも最も小さい人々を愛さずにはいられない理由です。イエスが彼らを優先し、ご自分と同一視したからです。わたしたちはヨセフから、同じ気遣いと責任を学ばなければなりません：幼子とその母を愛すること；秘跡と愛のわざを愛すること；教会と貧しい人を愛すること。これらの現実の一つ一つは、つねに幼子とその母なのです。

# 6．労働者である父

聖ヨセフを特徴づける一つの側面、また、最初の社会的回勅であるレオ23世の『Rerum novarum』の時から強調されてきた側面は、労働との関係です。聖ヨセフは、彼の家族の糧を確保するために正直に働いた大工でした。イエスは彼から、自分の労働の実りである糧を食べることの価値、尊厳、喜びを学びました。

何十年もの間一定の繁栄があった国々においてさえ、仕事が再び緊急の社会問題となり、失業率が時に衝撃的なレベルに達することもある今の時代に、新たな意識をもって、尊厳を与え、聖ヨセフが模範的な守護者である労働の意味を理解する必要があります。

労働は、救いのわざそのものへの参与、神の国の到来を早め、自分自身の可能性と資質を発展させ、それを社会と共同体への奉仕に活用する機会となります。労働は、自分自身のためだけでなく、特に、社会の核である家庭のための、実現の機会となります。仕事のない家庭は、困難、緊張、不和、さらには［家庭］解消の絶望的誘惑、絶望をもたらす誘惑に、より多くさらされます。わたしたちは、すべての人、そして一人ひとりが、尊厳ある生活が出来るように努力することなく、人間の尊厳について語ることが出来るでしょうか？

働いている人は、どんな仕事であっても、神ご自身と協力し、わたしたちを取り囲む世界の「創造者」のような存在になっていきます。経済的、社会的、文化的、精神的な危機である、わたしたちの時代の危機は、誰も排斥されない新しい「普通性」を生み出すために、労働の価値、重要性、必要性を再発見するよう、すべての人々に訴えかけるものに成り得ます。聖ヨセフの労働は、わたしたちに、人となった神ご自身が働くことを軽んじていなかったことを思い起こさせます。たくさんの兄弟姉妹に影響を与え、コロナ・パンデミックのために近年増加している仕事の損失は、わたしたちの優先順位を見直すように、という呼びかけであるべきです。労働者である聖ヨセフに願いましょう、仕事のない若者、人、家族がないように、わたしたちが努力して方法を見つけることが出来るように。

# 7．影にいる父

ポーランドの作家、Jan Dobraczyńskiは、『父の影』[[24]](#footnote-25)という本の中で、聖ヨセフの生涯を小説の形で語っています。彼は「影」という示唆的なイメージを使って、イエスとの関係において、天の御父の地上での影であるヨセフの姿を表現しています：ヨセフは、イエスを見守り、擁護し、その歩みに従うためにイエスから決して離れません。モーセがイスラエルに思い起こさせたことを考えてみましょう：「荒れ野では、この場所に来るまで、あなたがたが歩んだすべての道のりを、人がその子を背負うように、あなたの神、主があなたを背負ってくださったのを、あなたは見た」（申1・31）。このようにヨセフは生涯にわたって、父性を行使しました[[25]](#footnote-26)。

人は初めから父親なのではなく、父親になるのです。そして、世に子を生んだだけで父親になるのではなく、責任をもって子を世話するから父親になるのです。人は、他者のいのちの責任を負うたびに、ある意味で、その人に対して父性を行使するのです。

わたしたちの時代の社会において、しばしば、子どもたちは父親不在のように見えます。今日、教会にも、父親たちが必要です。聖パウロがコリントの人々に向けた戒めは、つねに今日的です：「たとえ、キリストを信じることであなた方に一万人の養育係がいたとしても、父親が大勢いるわけではありません」（一コリ4・15）。そして、一人ひとりの司祭、または司教は、使徒パウロのように付け加えねばなりません：「わたしこそキリスト・イエスにおいて、福音をもってあなた方を子としてもうけたのです」（同）。パウロはまた、ガラテヤの人々に言います：「わたしの子らよ、キリストがあなた方のうちに形づくられるまで、再び、わたしは産みの苦しみを味わっているのです」（ガラ4・19）。

父親であるということは、子どもを、人生の経験、現実に導き入れるということです。子どもを拘束するのでも、閉じ込めるのでも、所有するのでもなく、彼が選択できるよう、自由になれるよう、出発できるようにすることです。そのためか、伝統はヨセフに、父という称号のすぐそばに、「最も純潔（貞潔）な」という称号を与えます。それは単なる感情的な表示ではなく、所有の反対を表す態度の要約です。純潔さ（貞潔さ）は、人生のあらゆる面における、所有からの自由です。愛が純潔であって初めて、それは真の愛となるのです。所有を望む愛は、最終的にはつねに危険で、拘束し、窒息させ、不幸にします。神ご自身、人間を純潔な愛で愛しました。たとえ過ちを犯し、ご自分に逆らうことがあっても、人間を自由のままにしてくださいました。愛の論理は、つねに自由の論理であり、ヨセフは並外れて自由な方法で愛することを知っていました。彼は決して自分を中心に置きませんでした。彼は自分をわきに置くこと、自分の人生の中心に、マリアとイエスを置くことを知っていました。

ヨセフの幸せは、自己犠牲の論理ではなく、自己贈与［自らを賜物として差し出すこと］の論理にあります。ヨセフの中に不満（フラストレーション）を感じることはありません。ただ信頼だけがあります。彼の継続する沈黙は、泣き言を観想するのではなく、つねに信頼の具体的なしぐさです。世界は父親たちを必要としています。世界は、主人、つまり自分の空虚さを埋めるために、他者が所有しているものを利用しようとする人を拒否します。世界は、権威を権威主義と混同し、奉仕を卑屈さと、対決を抑圧と、愛のわざを過保護主義と、力を破壊と混同する人々を拒否します。すべての真の召命は、単なる犠牲ではなく、その成熟である自己贈与から生まれます。司祭職や奉献生活においても、この種の成熟さが求められています。ある召命が―それが結婚の召命であっても、司祭や修道者の召命であっても―、単に犠牲の論理にだけに留まって、自己贈与の成熟に達しないところでは、愛の美しさ、喜びのしるしとなる代わりに、不幸、悲しみ、不満を表現する危険があります。

子どもの人生を生きようとする誘惑を放棄した父性は、つねに前代未聞の空間を開きます。一人ひとりの子どもは、つねに神秘、前代未聞のものを運んでいて、それは、その子の自由を尊重する父親の助けをもって初めて明らかにされます。自分が「役立たず」になり、子が自立し、人生の道を一人で歩むのを見、ヨセフの状況の中に自らを置くとき初めて、父親は自分の教育的行為をなし遂げ、父性を完全に生きるのです。ヨセフはつねに、この「幼子」が自分の子ではなく、単に彼の世話に託された子であることを知っていました。本質的に、それがイエスの言おうとしたことです：「誰であれ、地上の者を『父』と呼んではならない。あなた方の父はただひとり、天におられる方だけである」（マタ23・9）。

わたしたちが、父性を行使している状態にあるときはいつでも、それが決して所有の行使ではなく、より高い父性を指し示す「しるし」であることを思い起こさなければなりません。ある意味で、わたしたちはみな、つねにヨセフの状態にあります：「悪人の上にも善人の上にも太陽を昇らせ、正しい者の上にも正しくない者の上にも雨を降らせてくださる」（マタ5・45）唯一の天の父の影であり、御子に従う影なのです。

* ＊　＊

# （おわりに）

「起きよ、幼子とその母を連れて行きなさい」（マタ2・13）と、神は聖ヨセフに言います。

この使徒的書簡の目的は、この偉大な聖人への愛を深めることです。彼の執り成しを願うよう促され、彼の徳と勢いに倣うために。

実際、聖人たちの特有な使命は、奇跡や恵みを与えることだけでなく、神のみ前でわたしたちために執り成すことです。アブラハム[[26]](#footnote-27)や、モーセ[[27]](#footnote-28)がしたように、「唯一の仲介者」（一テモ2・5）イエスがしたように。イエスは父である神の傍らで、わたしたちの「弁護者」（一ヨハ2・1）、「つねに生きて、［わたしたち］のために神に執り成しをしておられ［ます］」（ヘブ7・25；ロマ8・34参照）。

聖人たちはすべての信じる者たちが「聖性とそれぞれの身分における完徳とを追求する」[[28]](#footnote-29)のを助けます。彼らの生涯は、福音を生きることは可能だという具体的な証拠です。

イエスは言いました：「わたしは柔和で心のへりくだった者だから［…］わたしに学びなさい」（マタ11・29）。他方、聖人たちは倣うべき生活の模範です。聖パウロは明確に勧めました：「わたしに倣う者になってください」（一コリ4・16）[[29]](#footnote-30)。聖ヨセフはそれを、雄弁な沈黙を通して語っています。

イエスは言いました：「わたしは柔和で心のへりくだった者だから［…］わたしに学びなさい」（マタ11・29）。他方、聖人たちは倣うべき生活の模範です。聖パウロは明確に勧めました：「わたしに倣う者になってください」（一コリ4・16） 。聖ヨセフはそれを、雄弁な沈黙を通して語っています[[30]](#footnote-31)。

聖ヨセフに、恵みの中の恵みである、わたしたちの回心を嘆願しましょう。

聖ヨセフに、わたしたちの祈りを向けましょう。

あがない主の保護者、

おとめマリアの夫よ、

神はあなたにご自分の御子を託し、

マリアはあなたに信頼を置き、

キリストはあなたと共に、人となりました。

祝されたヨセフよ、

わたしたちにも、父であることを示し、

人生の歩みを導いてください。

わたしたちに、恵み、いつくしみ、勇気を与え、

あらゆる悪から守ってください。

アーメン。

ローマ、聖ヨハネ・ラテラノ大聖堂の傍らで

教皇在位八年目、2020年12月8日、

無原罪の聖マリアの祭日に

フランシスコ

1. ルカ4・22；ヨハ6・42；［参照］マタ13・55；マコ6・3。 [↑](#footnote-ref-2)
2. S. Rituum Congreg., Quemadmodum Deus (8 dicembre 1870): ASS 6 (1870-71), 194. [↑](#footnote-ref-3)
3. Cfr Discorso alle ACLI in occasione della Solennità di San Giuseppe Artigiano (1 maggio 1955): AAS 47 (1955), 406. [↑](#footnote-ref-4)
4. 使徒的勧告『救い主の守護者聖ヨセフ』（1989年8月15日）。 [↑](#footnote-ref-5)
5. 『カトリック教会のカテキズム』1014。 [↑](#footnote-ref-6)
6. Meditazione in tempo di pandemia (27 marzo 2020): L’Osservatore Romano, 29 marzo 2020, p. 10. [↑](#footnote-ref-7)
7. In Matth. Hom, V, 3: PG 57, 58. [↑](#footnote-ref-8)
8. Omelia (19 marzo 1966): Insegnamenti di Paolo VI, IV (1966), 110. [↑](#footnote-ref-9)
9. Cfr Libro della vita, 6, 6-8. [↑](#footnote-ref-10)
10. わたしは40年以上、毎日、朝課の後に、1800年代のフランス語の信心の本から取られた、イエスとマリアの修道女会の、聖ヨセフへの祈りを唱えています。それは、聖ヨセフへの崇敬、信頼、ある種のチャレンジを表現しています：

    「栄光に満ちた父祖、聖ヨセフよ、

    あなたの力は、不可能なことを可能にすることが出来ます、

    この苦悩と困難のときに、わたしを助けに来てください。

    わたしがあなたに委ねる、このように深刻で困難な状況が、幸いな解決を得るように、

    あなたの保護のもとに受け取ってください。

    愛する父よ、わたしのすべての信頼を、あなたのうちに置きます。

    わたしがあなたに空しく嘆願したと言われないようにしてください。

    あなたは、イエスとマリアの傍らで、すべてを行うことが出来るのですから、

    あなたの優しさが、あなたの力と同じくらい大きいことを、わたしに示してください。

    アーメン」。 [↑](#footnote-ref-11)
11. 申4・31；詩69・17；78・38；86・5；111・4；116・5；エレ31・20参照。 [↑](#footnote-ref-12)
12. 使徒的勧告『福音の喜び』（2013年11月24日）88、288項参照。 [↑](#footnote-ref-13)
13. Cfr Gen 20,3; 28,12; 31,11.24; 40,8; 41,1-32; Nm 12,6; 1 Sam 3,3-10; Dn 2; 4; Gb 33,15. [↑](#footnote-ref-14)
14. この場合、石打の刑が規定されていた（申命記22・20－21）。In questi casi era prevista anche la lapidazione (cfr Dt 22,20-21). [↑](#footnote-ref-15)
15. Cfr Lv 12,1-8; Es 13,2. [↑](#footnote-ref-16)
16. Cfr Mt 26,39; Mc 14,36; Lc 22,42. [↑](#footnote-ref-17)
17. S. Giovanni Paolo II, Esort. ap. Redemptoris custos（『救い主の守護者聖ヨセフ』） (15 agosto 1989), 8: AAS 82 (1990), 14. [↑](#footnote-ref-18)
18. Omelia nella S. Messa con Beatificazioni, Villavicencio – Colombia (8 settembre 2017): AAS 109 (2017), 1061. [↑](#footnote-ref-19)
19. Enchiridion de fide, spe et caritate, 3.11: PL 40, 236. [↑](#footnote-ref-20)
20. Cfr 申命記10・19；出22・20－22；ルカ10・29－37。 [↑](#footnote-ref-21)
21. Cfr S. Rituum Congreg., Quemadmodum Deus (8 dicembre 1870): ASS 6 (1870-71), 193; Pii IX, Inclytum Patriarcham (7 luglio 1871): l.c., 324-327. [↑](#footnote-ref-22)
22. Conc. Ecum. Vat. II, Cost. dogm. Lumen gentium, 『教会憲章』58. [↑](#footnote-ref-23)
23. Cfr Catechismo della Chiesa Cattolica, 『カトリック教会のカテキズム』963-970. [↑](#footnote-ref-24)
24. Edizione originale: Cień Ojca, Warszawa 1977. [↑](#footnote-ref-25)
25. Cfr S. Giovanni Paolo II, Esort. ap. Redemptoris custos, 『救い主の守護者聖ヨセフ』7-8: AAS 82 (1990), 12-16 [↑](#footnote-ref-26)
26. Cfr Gen 18,23-32. [↑](#footnote-ref-27)
27. Cfr Es 17,8-13; 32,30-35. [↑](#footnote-ref-28)
28. Conc. Ecum. Vat. II, Cost. dogm. Lumen gentium, 『教会憲章』42. [↑](#footnote-ref-29)
29. Cfr 1 Cor 11,1; Fil 3,17; 1 Ts 1,6. [↑](#footnote-ref-30)
30. Confessioni, 8, 11, 27: PL 32, 761; 10, 27, 38: PL 32, 795. [↑](#footnote-ref-31)